

イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：巣ごもり読書会『再帰的近代のアイデンティティ論』

日 時：2021 年 5 月 21 日（金）20:00～21:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：安達 智史（近畿大学）、鳥山 純子（立命館大学）

司 会：後藤 絵美（東京外国語大学）

後藤：みなさん、こんにちは。2021 年度最初の巣ごもり読書会を始めたいと思います。本日はどうぞよろしく願いいたします。

巣ごもり読書会は、科研費基盤研究(A) イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究、いわゆる I G 科研（代表：長沢栄治）の主催によるものです。この会のコンセプトは、本や論文など「書かれたもの」をきっかけに、ホストやゲスト、そして参加者の皆さんそれぞれが思うところを話すというものです。「読書会」を銘打っていますが、必ずしも予め本を読んでいなくてもよくて、今後読もうと思われたり、議論されたことを深めたりしていただければよい、というのがルールです。

後藤：今回の課題図書は安達智史さんの、『再帰的近代のアイデンティティ論——ポスト 9・11 時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム』です。安達さんは、東北大学大学院のご出身で、その後イギリスの研究機関に在籍された後、現在の近畿大学総合社会学部に着任されました。ご専門は社会学理論、多文化社会論、ムスリム女性研究です。今回のご著作の前にも、多文化化していくイギリス社会が、移民やマイノリティをいかに包摂していくのか、その状況を扱った『リベラル・ナショナリズムと多文化主義』という著作を出版されています。今日はまず、安達さんより、『再帰的近代のアイデンティティ論』の内容について、簡単にご紹介いただきたいと思います。

その後、対話相手としてお迎えしているのが、立命館大学国際関係学部鳥山純子さんです。鳥山さんは、人類学とジェンダー研究がご専門で、エジプトをフィールドとされています。ご紹介のところに「生活者の視点でエジプト都市部の幸せと痛みについて研究を行う」とありますが、今回の話題で言いますと、日本の第二世代ムスリムの親でもあります。

今日のリード文には「イギリスの第二世代ムスリムが生きるアイデンティティについて語り手が思うところを話し合います」とありましたが、どのようなお話が出るのか楽しみにしております。それではまず、安達さん、お話をどうぞよろしくお願いいたします。

安達：本日は三つの内容について話をさせていただきます。一つ目が本書の理論的な関心であり、二つ目がイギリスのムスリムについての背景についてです。参加者の多くは、中東やイスラーム社会をご専門に

されている方が多いかもしれませんが、イギリスの事例について情報共有をしたいと思います。三つ目に、本書の内容を簡単に紹介させていただきます。

まず、見ていただきたいのがタイトルです。名は体を表すということで、このタイトルを紐解きながら、私の理論的な関心を説明していきます。タイトルは『再帰的近代のアイデンティティ論——ポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム』です。まず「再帰的」という言葉ですが、この概念は社会学ではおなじみの考え方で、「選択前提もまた選択されうる」という事態を指しています。我々は行為する際に「選択」をおこなうわけですが、その選択は「構造」を通じてあらかじめ絞り込まれており、多くの場合、その範囲内（＝選択前提）でなされるというわけです。再帰的近代となると、かつて選択の前提とされていたもの（ex. 伝統、生活様式、宗教など）の自明性が失われ、そうした前提自体が個人の決断によって選択されるようになる。そして逆に、そうした選択が、全体としての伝統、生活様式、宗教を再生産するようになる。

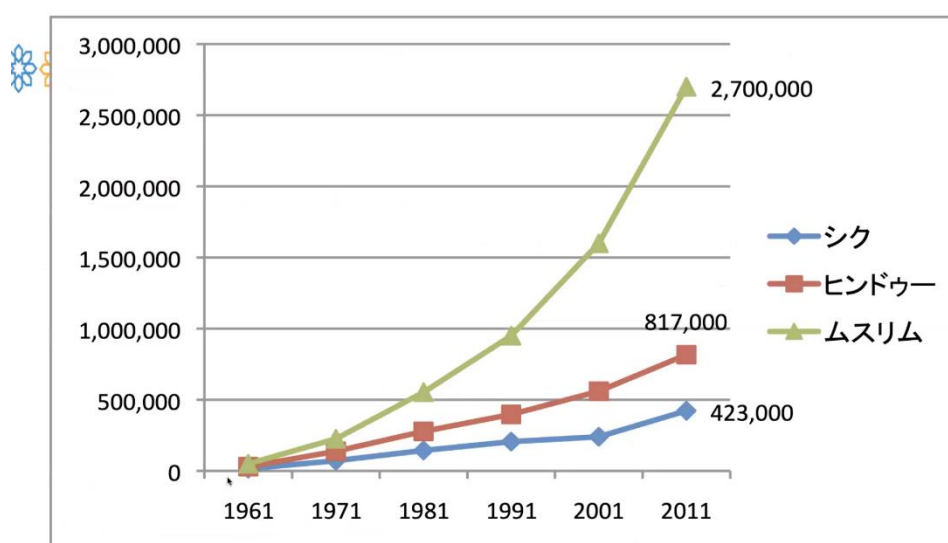
再帰的近代という枠組みが指し示しているのは、本稿の関心が、異なる伝統をもつイスラームと西洋社会との関係それ自体にあるわけではないという点です。むしろ、この概念によって、西洋社会に生まれ育った移民第二世代ムスリムが、非イスラーム社会のなかで（かつて自明な前提と考えられてきた）自身の信仰といかなる関係を持ち、個人の選択を通じてそれがいかに再生産されているのかに目を向けさせるものとなっています。

次に、副タイトルの「ポスト9・11時代」についてですが、この点はさほど難しくありません。「ポスト9・11」が表すのは、アメリカ同時多発テロ以降の西洋社会にみられるイスラモフォビックな言説の中で、移民第二世代ムスリムはアイデンティティを構築しなければならない。そして、そうした言説を踏まえた上で、彼女／彼らは自身の信仰を積極的なものとして構築する必要がある、という点です。

そして三つ目の「アイデンティティ論」は、アイデンティティをめぐる理論、つまりその形成をめぐる理論枠組みを示しています。エリク・エリクソンの心理学研究や多文化主義と関連するチャールズ・テイラーの承認論が論じているように、アイデンティティは独断的に成立しません。それには、他者からの承認を必要とします。ただし、いかにしてそうした承認を得ることができるのかという点について、多文化主義論は積極的に議論していません。そうした他者を前提としたアイデンティティの承認をめぐる問題は、むしろ社会学者のアーヴィン・ゴッフマンの自己呈示論のなかで精緻化され、論じられています。その議論によると、自己に対する積極的評価や自身の望むイメージの獲得には、他者に向けた印象管理が不可欠となります。この議論を、イギリスの移民第二世代の話に転用するならば、移民第二世代ムスリムは、現代イギリスという固有の社会空間の中で「ムスリムであること」への積極的な承認を獲得するために、アイデンティティの呈示技法を発展させる必要があるということになります。あるいは先ほどの議論と組み合わせれば、ポスト9・11時代の言説空間というゲームのルールを背景としつつ、他者に向けた自己呈示を通じてムスリムとしてのアイデンティティを再帰的に構築することが、彼女／彼らに課された課題となっている、ということができます。こうした理論的な関心のもと、本書の議論が組み立てられています。

さて以下では、イギリスとムスリムの関係をめぐる背景について共有したいと思います。「イギリスのムスリム」と言ってもあらゆるムスリムを指しているわけではなく、本書は主に「アジア系」のムスリムに焦点を絞っています。というのも、アジア系はイギリスのムスリムで多数派を占めているからです。なおイギリスの文脈でいう「アジア系」はいわゆる南アジア系であり、具体的にはインド、パキスタン、バ

ングラデシュの背景をもつ人々を指しています。インド亜大陸とイギリスは、植民地統治を通じて深い繋がりがありますが、イギリス本国にそうしたアジア系の人々の移民が劇的に増えるのは戦後復興以降の時期になります。1960年代から70年代に移民制限法が相次いで成立しますが、その前に多数の移民が殺到しました。家族呼び寄せは可能なので、それまで単身で来ていた男性が、妻、パートナーあるいは子供を呼び寄せました。結果、80年代になると、移民のジェンダー・バランスが大幅に改善されるとともに、地域にアジア系のコミュニティが形成されるようになりました。結果、イギリスの中で、ある種、アジア系文化に基づく生活がおこなえるようになったわけです。そういった中でコミュニティの力が強くなり、ローカルなレベルで多文化主義が力をもつようになりました。また、80年代後半のいわゆる「ラシュディ事件」を通じて、ムスリムは一つの利益集団であるという点が自他共に認識されるようになり、社会的・政治的プレゼンスをもつようになりました。



図：宗教的マイノリティ人口の推移：1961-2011年（イングランド、ウェールズ）
データ：1961-2001年はPeach and Gale (2003: 479)、2011年はCensus

上の図は、宗教的マイノリティの人口を表しています。2011年の時点でイギリスの人口の約5%がムスリムで、その数が劇的に増えていることがわかります。こうした人口増加も、イギリス社会のムスリムに対する不安を高めています。イギリスにおけるムスリムに対する危機意識は、9・11、あるいは特にイギリスの文脈で言えば、7・7（＝2005年のロンドン地下鉄爆破テロ）以降、急速に高まりました。この文脈の中でイスラームは、過激主義とともに、非民主主義的価値と結びつけられ、そこから、女性の抑圧という言説が出てきました。さらにこの時期になると多文化主義への批判が起こりました。つまり、多文化主義を通じて、文化的コミュニティが創りあげられることで、イギリスのなかに隔離化された文化的空間が生みだされている。そうしたコミュニティでは、イギリス社会と交わらないため、民主主義や自由といった西洋社会の価値を共有することがないと主張されたのです。その典型として「ムスリム・コミュニティ」が名指しされ、その統合が叫ばれるようになるわけです。実際に2005年のテロ後、労働党のトニー・ブレアが「統合する義務」という演説のなかで、多文化社会であることは良きことだが、イギリスの

共通価値、たとえば民主主義・寛容・平等はあらゆるコミュニティで共有されるべきだ、と主張しました。そして“Britishness”、つまり「イギリス人らしさ」というアイデンティティの共有を強く求めました。以降、ブリティッシュネスや共通価値が、ムスリムの統合をめぐる政治的に強調されるようになりました。

また、後の保守党のキャメロン首相は、非常に有名な「多文化主義の失敗」演説を行いました。多文化主義が文化的なコミュニティ、もっと言えば閉鎖的なムスリム・コミュニティを作り出し、その中で過激な考え方や民主主義の否定がなされ、最終的にそれがテロへと繋がったと述べました。重要なことは、安全保障をめぐる会議のなかで多文化主義が批判された点です。実際に、7・7後、そうした政治的言説を跡づけるように、エド・フセイン（＝かつてイスラーム過激主義に傾倒した人物）といった元イスラーム主義者によって、イギリスの若者の過激主義への傾倒に対して警笛が鳴らされました。

しかし私は、こうした言説に対して大いなる違和感を抱いていました。私は、2009年から15年の間に、計2年半にわたりイギリスに住み、そのときに、若者ムスリムと交流——フットボール、パーティでの会話、学習会への参加——をおこないました。彼女／彼らはイスラームをかなり重要なものと認識している一方で、イギリス社会に非常に上手く同一化、あるいは統合しているという印象を受けました。こうした経験から、本研究は、「イスラームと西洋社会は両立可能か」という文明論的な問いではなく、「いかにしてそうした両立は可能か」という方法や戦略をめぐる社会学的問いを提示しました。それが先ほどの「再帰性」や「自己呈示」という考え方と結びついていくわけです。



各章の内容

- 5章：構造的差別を通じたイスラームをめぐる言説の意識化
- 6章：「イギリス人であること」への愛着
- 7章：＜文化／宗教＞の区別による二つのアイデンティティの両立
- 8章：＜知識＞を通じた信仰の個人化と民主化
(とそれにとまなう自律性)
- 9章：女性をエンパワーメントするイスラーム
- 10章：女性のヒジャブ着用／未着用の意味
→自律性の象徴としてのヒジャブとモラトリアムの承認

最後に各章の内容を簡単にお話しします。分析は、約80名のイギリスの移民第二世代ムスリム（第三・四世代を含む）に対するインタビュー・データに基づいており、その結果が5章から10章で論じられています。

最初の2つの章では、アイデンティティが構築される場となるイギリスという社会空間に対する移民第二世代ムスリムの認識について議論しています。5章ではインフォーマントが、構造的差別やイスラモフォビア、つまりイスラームに対する否定的なまなざしをいかに内面化・意識化しているという点を明らかに

しています。彼女／彼らは、日常的に差別を経験し、とりわけメディアにおけるイスラーム描写に対してかなり否定的な認識を有していました。ただし、6章では「イギリス人であること」をめぐり、非常に肯定的な意見をもっている点を論じています。インフォーマントは、「イギリス人で良かった」あるいは「フランス人じゃなくて良かった」、そんな風に発言しています。なぜならイギリスは多文化社会であって、いろいろな宗教に開かれ、また多くのチャンスがあると考えているからです。

7章以降、そうしたイギリスでの生活のなかで、逆に、移民第二世代の若者が、イスラームとどのような関係を持っているのか、そしていかにそれをイギリス社会への適応と結びつけているのかについて議論しました。7章では、彼女／彼らが「イスラームとは何か」を説明する際、ポジティブな規定をおこなわない点に着目しています。「ポジティブ」というのは、「イスラームとは〇〇である」という表現を意味するわけですが、彼女／彼らは、そういった方法をおこなわず、ほとんどの場合、「ネガティブ」に、つまり「イスラームとは××ではない」と説明します。この点について当初、私はとても奇妙に感じていましたが、注意深く聞いていくうちにその理由に納得しました。この「××」に入れられるのが、「文化」でした。つまり、イスラームに対する否定的な言説——女性の抑圧、寛容性の欠如など——に対して、「それは宗教ではなく文化と関係するものですよ」と述べることで、イスラームを批判から守っているのです。そうすることで、イスラームが西洋社会やイギリス社会の生活・価値と両立できると主張しているのです。加えて、宗教と文化の区別は、古い価値を押しつけてくる家族やコミュニティに対する防波堤にもなっています。

こうした区別はいかにして可能なのかというのが、8章の内容です。物事の識別には審美眼が必要ですが、それには対象に対する知識が不可欠です。これは宗教でも同じです。私がインタビューをおこなった若者たちは、自身の世代と上の世代との違いに、「宗教的知識」の有無をあげています。教育水準やリテラシーの高さ、あるいは情報化を背景としたインターネットや本を通じて、若者はさまざまな宗教的知識を得ることができます。こうした情報化やそれを消費する能力の上昇は、「信仰の個人化」をもたらします。伝統的コミュニティに依存せず宗教的知識を獲得することで、彼女／彼らは、自身の生活する社会と矛盾しない形で、個人の手でイスラームを解釈することが可能となるわけです。

残りの二つの章は、特に女性に焦点を合わせています。9章では、ほとんどの女性インフォーマントが、教育や労働という面で、女性をエンパワーメントする宗教としてイスラームをとらえている点について論じています。彼女たちは、イスラームの伝統（ex. 「知識」の重視）や歴史的人物（ex. ハディース、アイシャ）に基づきつつ、女性の就労や教育を正当化しています。10章では、女性のヒジャブ着用／非着用に対する意味について分析しています。まずヒジャブ着用の意味について、司会をされている後藤絵美さんの『神のためにまとうヴェール』——なんと美しいタイトル！——に基づき、分析しました。そこで彼女たちは、その着用を女性の自律を表すものだととらえている点を明らかにしました。加えて、ヒジャブを着用しないことの意味についても検討しました。そこで、ヒジャブをしないこともまた、イスラームの教えの観点からモラトリアムとして容認されている点が示されました。

以上の分析から、インタビューをおこなった移民第二世代ムスリムは、9・11以降のムスリムに対する否定的言説を意識するとともに、それをアイデンティティ構築の前提としている点が見えてきました。そして、そういった言説を逆に利用することで、つまりイスラームは非民主主義的で女性に抑圧的だという言説が存在するならば、それに対して反論することで自身のアイデンティティ、つまり「ムスリムであること」を再帰的に構築しているのです。その際、＜文化／宗教＞の区別が重要になっているというの

は、先ほど説明した通りです。そしてこの区別には、イスラームの知識が重要であったわけですが、そうした知識と解釈を通じてイギリス社会と新たな関係を構築しようとしているのです。こうしたあり方を社会システム論的に述べるならば、「閉じているがゆえに開いている」つまり「イスラームへの積極的言及を通じて、イギリス社会の生活や価値に開かれている」と表現できます。

本書の内容要約は以上となります。清聴ありがとうございました。

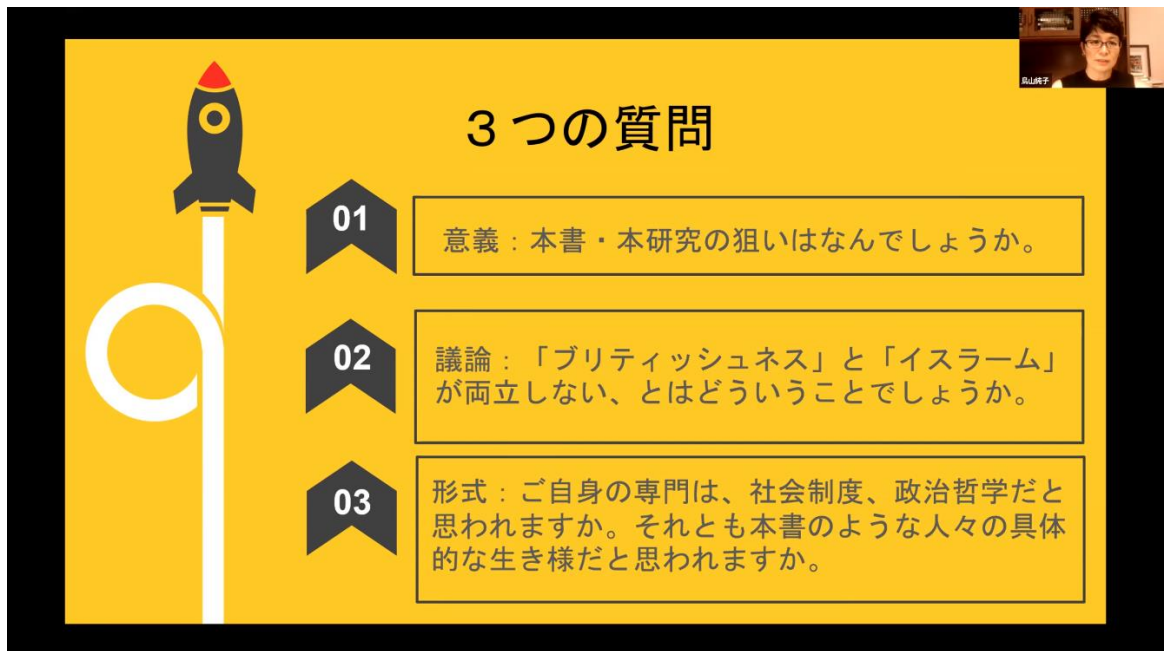
後藤：ありがとうございました。それでは、最初の対話相手としまして、鳥山さんにご登壇いただいて、会話を始めてもらいます。

鳥山：今回安達さんとお話をさせていただくにあたり最初に考えたのが「なかなか結構な大著だけれども、どうしよう」というところでした。今回は、普段他のところで活動している安達さんが来てくださることになったからこそ、この巣ごもり読書会というイベントの意義を再確認し、正直に「本当のところはここが理解できなかった」「どちらかと言えば私はこのように考えますが、いかがでしょうか」というように双方向で対話できたらいいなと思っています。

まず、5章以降の章と説には、ものすごくたくさん語りの引用が書かれています。その語りをたくさん引用し、そこに対して説明を加えて、ご本人の表現を借りれば「この語りの形式に注目をして、その分析からムスリムのアイデンティティを明るみに出す」ことが目的とされているのだと理解しました。ただ、この本を読んでまず浮かんだのは、「これはアイデンティティの話なのだろうか。むしろ出てくるインフォーマントの彼ら彼女らがイスラームをどう生きているのかという話ではないのか。なぜそれにわざわざアイデンティティと名前を付けたのだろうか。」という疑問でした。私がエジプトに暮らして、その後調査に行くようになって接しているムスリムなどもここで引用されているのと同じようなことを言っています。ある意味では、著者の主張は、とても普通のことに聞こえるのです。例えば宗教と文化の使い分けということがこの本の大きな発見として出てきますが、私がそれに対して抱いたのは「なぜこれが特別なんだろう」という感覚でした。むしろ私がこの本を読んで感じたのは「この事例で描かれることが特別なものとされるこの現代イギリスという場の特殊性が書かれているのではないか」ということです。

現在イギリスといえば、例えば最近のイギリスはネオリベリズムの究極の形みたいなギグエコノミーの話や労働者階級の切り捨てなどの話で盛り上がっているのだと思いますが。本書ではとりあげられていません。むしろ移民の状況やムスリムの置かれた位置付けのような話がそうした文脈から切り取られてしか描かれない。つまり、イギリス社会についてすでに私に知識があるのなら、ここで書かれていることが良く理解できるかもしれないのですが、現状においてはそれが難しいように思いました。

本日は私から三つの問いを安達さんには提示させていただきたいと思います。三つご提案する中で安達さんに好きなものを選んでいただいて、この安達さんの説明に、さらに私が質問する形式で進めさせていただきます。



3つの質問

- 01 意義：本書・本研究の狙いはなんですか。
- 02 議論：「ブリティッシュネス」と「イスラーム」が両立しない、とはどういうことでしょうか。
- 03 形式：ご自身の専門は、社会制度、政治哲学だと思われませんか。それとも本書のような人々の具体的な生き様だと思われませんか。

意義・議論・形式の三つありますが、まず「意義：本書・本研究の狙いはなんですか。」についてです。この質問の意図は、さきほどの安達さんの議論では納得できないところがあって、もう一步突っ込んで聞きたいところです。そして、「議論：『ブリティッシュネス』と『イスラーム』が両立しない、とはどういうことでしょうか」については、そもそもなぜそれは両立しないと思ったのかという疑問です。人間はやはりある意味で矛盾しうるような多面的な存在として生きているわけですので、この前提はどこから来たのかについて伺いたいです。最後の「形式：ご自身の専門は、社会制度、政治哲学だと思われませんか。それとも本書のような人々の具体的な生き様だと思われませんか」について。私個人的に、安達さんの一冊目の本がしっかりした社会制度・政治・哲学から多文化主義にアプローチする内容でしたので、その意味で本書は大きな転換だと思いました。その辺りについて、ご自身がこの転換をどのように感じておられるか伺いたいです。

安達：ありがとうございます。では、三番目の「形式」についてお答えします。私はもともと社会学理論、社会統合、政治哲学あるいは多文化主義を研究しており、その事例としてイギリス社会に関心を持ちました。20世紀を前後し、ポスト多文化主義哲学としてリベラル・ナショナリズム論が盛り上がりしましたが、そこでおこなわれている議論は、2000年代のイギリスの社会統合政策を分析する上で、とても有用な枠組みでした。それは移民の急増に対する反動とともに、9・11にみられるイスラーム過激主義をいかに押さえ込むのが西洋社会の課題であったためです。

ただ、私は半年ほどイギリスの研究所にいたのですが、そのときに会った若者ムスリムは、そうした過激主義化や西洋社会への不適合といったイメージとは異なるのではないかと実感しました。つまり第二の質問（「議論」）にありますように、ブリティッシュネス、つまり「イギリス人であること」と、イスラームがアприオリに対立するものではないととらえるようになったのです。こうした経験に基づき、いろいろ話を聞いていくなかで、イギリスの移民第二世代を記述するために、再帰的近代化論が適合的だと感じました。

鳥山：つまり端的に言ってしまえば、ムスリムにはそんなに興味がないということでしょうか。

安達：興味とは何を持って、というところでしょうか。

鳥山：安達さんがご興味をお持ちなのは社会制度の話であり、今の社会言説が抱えている問題を明らかにする事例としてムスリムを取り上げているのでしょうか。

安達：私としては、イスラームというよりも、人間としての「ムスリム」に関心がありました。社会統合をめぐる制度や哲学については、前著（『リベラル・ナショナリズムと多文化主義——イギリスの社会統合とムスリム』）を通じて私の中ではすでに終わっているのですが、そのなかに暮らすムスリムたちの信仰と社会との関係のあり方に関心をもち研究をおこなってきました。

鳥山：文化人類学的なエスノグラフィを読んでいる身からすると、これだけたくさんの語りを引用しているにもかかわらず、最後の議論では最初に用意された多文化主義を前提とする、ある種ムスリムはブリティッシュネスを持ちえないという二項対立的な議論にはまるのかどうか、という論点だけで議論が終わっている気がします。もしも、ムスリムとして生きる人々に正面から取り組むのであれば、もっといろいろ言えることがあったのではと思いました。ここから推測できるのは、それだけ丁寧にたくさんの語りを使わないと、このブリティッシュネスとイスラームが両立しないという言説に抵抗するのが難しい、という現状です。しかしやはり私にはそれが、ムスリムたちに真摯に関心を向けた態度には見えません。あれほど多くの語りを出してきて、一緒にコミュニティでスポーツして楽しんだという話があるにもかかわらず、それらは「おわりに」と「あとがき」の方で触れられるだけにとどめられています。そうした箇所では、すごく人間味溢れる素敵なストーリーが展開されるのに、全体としての議論が少し無味乾燥と言いましょ、うか、人に対する興味を十分に感じることはできません。そうせざるを得なかった、その選択の背景にはどんな懸念があったのでしょうか。

安達：日本のイスラーム研究の多くは人類学の方々によって担われており、そうした点からみると、社会学である私の研究は無味乾燥にみえるかもしれません。本研究でみられる対象との距離化には、さまざまな理由があります。たとえば、私はあくまでも彼女／彼らにとっての「アウトサイダー」であったという点があげられます。私はそれなりに長い期間（計2年8ヶ月）、イギリスで暮らしていましたが、ほとんどのインフォーマントは、私とは一時的な関係しかもたないわけです。それは、ワンショット・サーベイという方法に由来します。ただし、アウトサイダーであることにもメリットはあります。それは、対象を客観的にみられるという点ではなく、むしろ、インフォーマントとアウトサイダーとしての私が相対しているインタビュー過程が、彼女／彼らが非ムスリムの人々と日常的におこなっているコミュニケーションの再現としてとらえられるという点です。そこで私は、彼女／彼らの実際の生活よりも、他者に向けた自己呈示の分析を通じて、そのアイデンティティのあり方に焦点を当てるようになります。

鳥山：本書を一番読んでもらいたい、あるいは一石を投じたい相手というのは、多文化主義論という理解で大丈夫でしょうか。

安達：多文化主義論というのはどういうことでしょうか。

鳥山：つまり、ムスリムが特殊なものとして位置づけられてしまうような言説に対して、もっと現実寄り添ったものの見方をしなくてはいけないのではという一番のところですが、やはりそこに帰ってくる、ということです。

安達：そうですね。私としてはそういうところがやっぱりあります。

鳥山：それから派生して聞いてみたいのは、元々はイギリスの、更に政治哲学や社会制度のご専門ということで、そこでイスラームを論じることの難しさや抵抗はあったのでしょうか。

安達：抵抗というのは具体的に言うと、どういう事でしょうか。

鳥山：例えば中東を専門にしていると言うと、好き嫌いに関わらずどこかの時点でイスラームに触らなくてはならないときがきますよね。でもおそらくイギリスの政治哲学であれば、必ずしも触らないでも済むものだと思うのです。ある意味そっちが主流かもしれないですし、そこでも例えば今回第八章でイスラームの知識に丸々一章を費やして議論されていますが、それはそれほど抵抗というか、どうしようかなというのはなかったのでしょうか。

安達：特にそういうものはないです。むしろ現代西洋社会の社会統合や多文化主義と関わる議論をおこなう場合、ムスリムに言及しないわけにはいきません。特にヨーロッパの場合は（アメリカは少し異なるかもしれませんが）、多様性の問題やインターカルチャーリズムといった政治哲学的議論の対象として、実質上、ムスリムに念頭が置かれています。むしろムスリムに触れなければ、最新の議論はできないわけです。

鳥山：つまりイスラームについて語らなければ、ムスリムについて扱うこの書は成立しないと考えて、第八章であえてイスラームを語ったということでしょうか。

安達：ちょっと今質問の趣旨がピンときていないんですけども。

鳥山：つまり第八章はイスラームの知識とたてなくてもできたのでは、というのが私の感想なのです。言ってしまうと、ここまでイスラームの議論をする時にも様々な立場があり、ある意味踏み絵みたいなものがある状況の中で、それが明確に見えていないところに足を踏み入れるのはなんか難しかったのでは、という読みと、そう思わないと、それ以外の書きぶりとはやはり少し違う、なんでこうやって言っているのだろうというところがあったということで、お伺いしています。

安達：そうですね、そういったイスラームをめぐる状況についてあまりよく分かっていなかったのも、不用意に飛び込んだということはあるかもしれません。私は、インタビュー過程で、インフォーマントが宗教を語るときに“research”という表現を使う点に強い印象を受けました。イスラーム研究者の方にはおなじみかもしれませんが、信仰について語る時になぜ「探究／調査する（research）」と表現するのか、それはどういう事態なのか、その点を知りたかったのです。そこで、彼女／彼らが、イスラームをどのようなものとしてとらえ、その探究の対象たる「知識」にどういう意味を与えているのか、そうした点を描いたのです。

鳥山：私はこの第八章について、彼らが語る知識の重要さにもっとこだわっても良かったのかなと思い、少し残念に感じました。彼らがムスリムとして語るイスラームの知識の話と、すでに成立している知識として言われている「イスラームの知」の話は必ずしも同じとは限らないと思っています。ここで、もしかしたら主語がすり替わってしまったのではないかと感じました。つまり、彼らが想起しているものを理解しているつもりでいても、同じ名前をつけられた別のもの、具体的には、既存の「イスラームの知」に対する議論に、どこかでずれた、という印象を受けましたので、あえてお伺いさせていただきました。

後藤：ありがとうございます。おそらく出席者のみなさんは、今、第八章読まなきゃと思っていると思います。おそらくその辺は共同研究の良いところで、こういう場に持ち込んで皆さんが読んで、その興味を持った人がまたお互い色々言い合うところかなと私も思いました。

それではここから質疑の時間に入ります。

質問者1：今のご報告お聞きして思った事を何点か申し上げさせていただきたいと思います。インタビューをなさった方々というのは、もしかして教育をしっかり受けられたアッパー層の方々がメインなのかなと思いました。イギリスでテロリストになったような人達は、上手く統合されない人達、非常に恵まれない階層の人達がそっちにいてしまうわけで、そこを描かずに一部の恵まれた人達を描いたのかなと、読んでもなくて勝手な思い込みですがそう思いました。また、インタビューされた方々はどれぐらいイスラームの知識を持ってらっしゃるのかなと。例えば、同じムスリムと言っても、全くクルアーンを読めない人もいます。イギリスの教育を十分受けられた方々で、イスラームをアイデンティティとされている人達はスカーフを被っていらっしゃるのそういう方々なのかなとは思いますが、どれぐらいクルアーンを読んだりとか、日頃イスラームの布教者の人達とどんどんインターネットで繋がっていたりだとかしているのでしょうか。ひょっとしたらイギリスにいて日常的にアクセスして、イスラームの知見を得て、自分を肯定的にイスラーム教徒であることに自信を持っているのか、そういうところがちょっと気になりました。また、イスラーム学者の説によればスカーフはエンパワーメントするためで義務ではないと、あれはアラブの七世紀の社会環境によって必要とされたというか。だから解釈の仕方が根本的に変わっている様なリベラルな思想潮流がある中で、そこにアクセスしてはいないけれども、モラトリアムとおっしゃったので、おそらくそれではない思想で被る事が良いことだ、それは必要だけど今できないということなのかなと。そうするとイスラームの知識を非常に得て、そういうリベラル派の思想にアクセスして

いるわけでもなく、ただイスラームにコミットしているのか、どういうきっかけでそういうふうになったのか伺いたいです。

安達：大変重要なお指摘だと思います。本書のインフォーマントの学歴は相対的に高いです。ただし階層は低く、つまり親はほとんど大学を出てないですし、階層もかなり低い、そういう意味では平均的なイギリスのアジア系ムスリムという感じです。その意味で、本書のインフォーマントはいわゆる「エリート」ではありません。ただし、ある程度のリテラシーを持っているのは確かです。イスラームの知識の面では、個々人によって差があります。また、若い人は宗教的知識に強い関心を持っていますが、30代以降になるとそこまで強調しない傾向にあります。当時20代ぐらいの人達は宗教的知識の重要性を強調していましたが、それは小さい頃からマドラサなどで、イスラームやアラビア語、クルアーンの読み方などを学んでいる人が多かったからだと思います。もちろんそうした活動に参加していない人もいましたが、高いアラビア語能力をもつ人もいましたが、ほとんどは英語でイスラームを理解し、知識を得ていました。いずれにせよ、総じてリテラシーは高いと言えます。

ただ、どういう要因によって過激主義に陥るのかは結構難しい問題です。たとえば、テロを起こすのはむしろエリート層だというのは、ムスリムに限らず指摘されている点です。必ずしも貧しい人がテロリストになるとは限りません。貧しいとか抑圧された人が周りにいると、自身が同じ立場にいないとも、それに対する義憤を通じてテロへと傾倒することはあるかもしれませんが。いずれにせよ、学歴が低さと過激主義との関係は自明ではありません。ただしおっしゃるように、さらに貧しい北イングランド、最も貧しいムスリムコミュニティの中でのインタビューだと、また少し違った何かが見えたのかもしれないと思います。

鳥山：例えば本当に労働者階級で全然余裕がないような若者は、逆に宗教には行きづらいのでしょうか。

安達：モスクに通う人の中には階層が低い人も多数います。ただし、礼拝をおこなうことと、イスラームの知識を積極的に得ることは違います。モスクにいるほとんどの人は、知識の獲得ではなく、礼拝のために来ています。積極的にイスラームの知識を摂取しない人たちが、イギリス社会にどのように適用しているのかは、私の調査からはわかりません。移民二世世代を対象とする本研究では、知識に無関心な人はほとんどいませんでした。ただ、イスラームについてあまりうまく説明できない人もおり、そうした人たちは総じて、イギリスにおいてムスリムであることに困難を感じているようでした。

鳥山：少なくともこのインフォーマントの方たちは言説としての社会資源をうまく使いこなして自己表現できているわけですからね。

安達：そうです。

鳥山：ありがとうございます

後藤：ありがとうございます。では、お次の質問者の方、お願いします。

質問者2：最初にお話いただいたものは私もアメリカのムスリム社会を研究する中で非常に同じだなと思いました。例えば宗教と文化を分けるなどです。あと、私は第二世代に非常に関心があり、第二世代の人達が新しい動きを起こしているのは明らかだと感じていて、イギリスの社会階層や状況的には結構違うところもありますが、そうは言っても西洋という文脈の中では、かなり共通しているものはあるなと感じました。私は理論とかはよく分かりませんが、実際の事例のところで見ると、安達さんがお話になられたイスラームの知識に関することが大事だと。私はどちらかというと、まさに知識の内容の部分の研究していて、近年結局そこでいう知識が何なのかが一つ大きな問題になってきています。イスラーム主義者の言うような知識もあれば、非常にリベラルな人達の言う知識もあれば、そうじゃないものもある。私はその中でも特にスンナ派の非常に伝統的な知識を求める人達の運動を研究していて、実はこれはイギリスともリンクしている運動で、伝統的なイスラームを復活させるという、特に白人の改宗者などが中心になってやっているものです。イギリスだとアブダル・ハキム・ムラドなんかが代表的な論者で、アメリカの方の人達のこともやっていますが、そういう観点で私も感じていて、なぜ自分が第二世代をやるかと考えた時、アメリカに行った時にスーフィズムをやるというのがあったとしても特にこの人達を調べようというのではなくて、色々な人と付き合う中で、調べやすい人にアプローチしたら結局第二世代の人でした。それは私と年代が一緒だったりして、あと話題もよくあって、さらに言うとは実はイスラームの見方もよく似ていて、第二世代の人達は私が見ると結局アメリカ人なので、見方がエジプトにいた時に会った人達とは全然違って、こういう言い方するとあれですけど、ある種のオリエンタリズム的な見方をしている部分を感じました。つまり、やはり自分のルーツだけでも、でも自分は正直言うと中東には住めない、みたいな。でもそこがルーツだからやっぱりそれについては調べようとしていて、それで90年代あたりに留学とかに行っていて、私もちょうど勉強するためにいっていたので研究が非常に共通しているのです。

その関連で言うと、なぜ中東で勉強するのかというと、やはり正しい知識を得るためという観点になりますが、ただやっぱりその見方が結局イスラームから離れて、つまりある意味では私のようにムスリムではなくイスラームに興味があって、イスラームが何かしらのロマンチックなものとして感じる人達と、かなり共通しているものを感じています。だから第二世代のイスラームに対する発言というのは、そういう意味で言うと、イスラームを対象化して、それでそこにアプローチしていると私も感じています。そういうオリエンタリズム的な見方がイギリスの人達にも共通してあるのかなというのが一つ私の実感です。中東とかに対する眼差しはどういうものを感じられたのか、あるいは南アジアの方が多いので、南アジアに対する眼差しでしょうか。

もう一つは、結局アメリカのムスリムの人達はアメリカにしか関心がない部分が研究方法とかにもあって、それはやはり自分が、アメリカでイスラームをアメリカ社会に関連する形で実感できるから実践したいという気持ちでやっていて、極論するといわゆる正しいイスラームって抽象的なものを別に求めているわけではないのかなと感じました。知識を求めるといっても、結局のところアメリカで使える知識ということです。知識といっても文脈がありますので、イギリスという、あくまでも自分の今の生活に関係する部分に関心があってやっているのか、という二点をお伺いできればと思います。

安達：インフォーマントのルーツとなる国との関係は複雑です。彼女／彼らは、「イギリス人で良かった」と思っています。おっしゃるように、休暇でバングラデシュやパキスタンに戻るのとは別にいいのだけ

れど、そこに暮らせないと考えています。ただしそういったアジア的なものを全部否定しているのかというとそんなことはなくて、食べ物とか、あるいはいわゆる「お見合い結婚」と呼ばれるアレンジド・マリッジは結構ポピュラーです。半数以上の者が、アレンジド・マリッジで結婚しているか、あるいはそれでもいいと考えています。ラブ・マリッジを好む人も多いですが、別にアレンジド・マリッジでもかまないという人もかなりいます。それはなぜかという、強制しないから。イスラームは強制は駄目と言っているけど、アレンジド・マリッジは強制しないから問題ない、と。そのために、「強制による結婚」つまりフォースド・マリッジが、否定的なものとして言及されるわけです。いずれにせよ、文化的慣習を評価する場合でも、最終的にイスラームが持ちだされる、この点は重要です。その範囲内で、許容する／否定する文化が決められているわけです。

二つ目の「知識」についてですが、どういう知識を彼女／彼らが摂取しているのかは調査できてはいません。ただ、先ほど述べましたように、イスラームは非常に巨大な体系であり、そのすべての側面を同時に探究することは不可能です。移民第二世代ムスリムは、自身の関心に応じて宗教的知識を習得し、彼女／彼らなりのイスラームを発展させています。つまり、彼女／彼らがフォーカスを当て、発展させているイスラームは、他者からのまなざしに対する応答と関係しているということです。他者からのまなざしや批判に対する理論武装を通じて、イスラームの探究を行っているということです。たとえば若者は、「写真撮ることはイスラームにとって認められうるか」といった身の回りの問題を、イスラームの知識やスマホなどを用いて根拠を調べながら友人とディスカッションをおこなったりしています。そうした日々の問いかけ、議論、探究を通じて、「私のイスラーム」が形成されているのです。

あと、スーフイズムに言及されていましたが、イギリスのアジア系の間でもポピュラーでした。私も、スーフイーの集団礼拝に参加させてもらったことがあります。

後藤：はい、ありがとうございました。今日の回、安達さん本当に長々とありがとうございます。それから鳥山さんのジャブに耐えてくださって本当にありがとうございます。

最後に温かい言葉を、IG 科研の代表の長澤榮治先生からいただければと思います。

長澤：温かい言葉になるかどうか分からないのですが、今日は本当に内容の濃いお話とご報告と鋭いコメントありがとうございました。短い時間でしただけで、皆さんお楽しみだったのではないかと思います。

私はイスラーム・ジェンダー科研を今まで面倒と言いますか、お世話してきました。私はイスラーム・ジェンダー科研というサーカスでテント張ってその後ろでコンコンと杭を打ってボーっとして時々中から声がして、お前も少し芸をしろという。中では猛獣使いとか綱渡りとかピエロとか色々あるんですけど、私は何も芸がないので、時々出ると言われて困ったなと思いつつも何かお話ししないといけないと思います。イスラーム・ジェンダー学で私個人的な考え方で比較的重視しているのが異業種間のバトルとか、異種格闘技じゃないけども、それは専門分野を超えてだけではなく、他の色々な知見を持っている市民の方等含めて色々な交流の場になればいいかなと思っております。今日もそういう意味で非常に勉強になる会だったと思います。私も全然不勉強ですけど、ネイティビストではないと言いますか、自分が本当にイスラームを知っているというような考えを持っているネイティビストではないような個人としてのムスリムとの間で、そういう人達は自分の姿を外側から見るができるような形ではお互いにそれに接する研究者が同じく同様な外側から自分が見られるような、これを再帰的近代化というのか分かりません

が、そういう人達が議論する場というのも色々な形で作っていくべきだと思います。イスラーム・ジェンダー学もそういう場の一つでありたいと思いますし、比較的それが学術的であると同時にやはり社会的な意味がある会なのでは思っております。ということで、こういった議論をまた深めていただければ、とてもありがたいと思います。今日は本当に夜遅い時間にもたくさんの方がご参加いただきましてありがとうございます。また次回もよろしくお願いいたします、以上です。

後藤：長澤先生ありがとうございました。それでは一旦締めましたが、ここから 15 分ぐらいお時間がもしいただけるようでしたら、ざっくばらんに皆さんどんどん質問をもらって、お話いただければと思います。

鳥山：安達さんの本の中でも、イスラームに夢を見過ぎではないか、と思わされるところがありました。あれはインフォーマントのその世界観をそのまま表していたのだな、と分かり腑に落ちました。やはり書き分けが難しいですね。現象として起こっていることと、その現象をどうやったら上手くつかめるかというその話と分析と。当たり前ですけど、インフォーマントが言っていることと、調査者による分析や解釈は切り離せず、絶対引きずられる部分はあるし、それが寄り添うということだと思いつつ。だからこそ、そこに入ってくることができない人達の存在も考えると重層的で面白いですね。

後藤：ヒジャブあるいはヴェールは被らなくてはならないという論調が今、エジプトでもどうもイギリスでもあるようですが、その知識は一体どこから来ているのだろうと思います。どうして世界的にそういう知識がここ数十年主流であり続けるのかについて、ヴェールを脱いだ女優の話を見ると、彼女にとってはそれが当たり前で何の疑問も抱かずに選んだ結果だけれども、それはなかなか主要な、メイン・ディスコースにならない。そうすればそれはなぜだろうか、と。その辺安達さんは何か思うことはありますか。

安達：それはなんとも言えないですね。特にアジア系のコミュニティでは全員ではないですが、ヒジャブを被っている人がほとんどです。また注意すべきは、いつ被り出すのかは結構まちまちだという点です。

後藤：それって例えば、何か同じ本を読むとかがきっかけになるとかではないのでしょうか。

安達：友人がスカーフをし始めたから自分もやろうという人や、姉が被り始めたからとか、適齢期（進学、結婚など）になるからちゃんとイスラームに向かい合ってみようとか、知識を学んだ結果、腑に落ちてやってみようとか、さまざまです。あるいは若い人ほど、小さい頃からマドラサなどに参加している人が多いので、そうしたコミュニティの影響があると思います。

鳥山：第八章にそれが欲しかったですね。彼女彼らはどんなサイトを見ているのか、など。それらがもし書いてあったら更に面白かったですね。

後藤：再帰的近代論というのは知識の出所まで突っ込むべきなのではないでしょうか。

安達：そうだと思います。

鳥山：聞けそうな感じは伝わってくるのですが。安達さんがここまで語りを聞けているなら、誰のインスタをフォローしているかくらい聞いてほしかったな、と。

安達：当 Instagram や Twitter があつたのかよく分かりませんが、インターネットはすでに活用されていました。調査を開始した、2009 年の時点では、そういった点についてあまり分かっていなかったというのはあります。

後藤：ご質問の方、お願いします。

質問者 3：イギリスよりもフランスの方がムスリムは数が多いと思いますが、それでもフランス人ではなくて良かったというのは、どういう具体的な理由があるのでしょうか。

安達：共和主義やライシテ（＝政教分離）の伝統をもつフランスでは、学校等々でスカーフの着用ができないとか公共の場面でのヴェールが禁じられているとか、そういう点をインフォーマントは知っていました。逆に、イギリスではそうした慣行は大きな問題になりません。学校でスカーフをすることもできますし、ヴェールに関しては色々問題はありますが、公共の場でヴェールをしたって良いという点で、多文化が認められています。そういう点から、フランスを槍玉にして、暮らしているのがイギリスで良かったとよく表現します。

実際に、ロンドンで働くでフランス人の方にインタビューをする機会があり、その方は、礼拝や宗教的衣装を許可してくれるイギリスの会社に大きな感銘を受けていました。上司は非ムスリムですが、礼拝があれば行ってもいいと声をかけてくれる、と。そういった点で、大陸ヨーロッパに比べてイギリスは、批判を受けつつもなお多文化主義的な要素が強い社会だと思います。

鳥山：ムスリムが問題になることの歴史が浅いとおっしゃっていましたね。

安達：それもありますし、おそらくはローカリズムの伝統の影響があると思います。イギリスは帝国の歴史のなかで分断統治をおこなうわけですが、そこで土着の文化を残すわけです。文化や民族に基づき社会を分割し、ローカルな文化に強く介入しないわけです。それはまた、イギリスにおけるナショナリズムの形成が遅い点とも関係しています。イギリス自体が、4つのネーションからなる多民族国家（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）であり、「イギリス人」はさほど明確なものでもなく、また人気のない概念でした。イギリスは経済面での近代化が早かったですが、政治面では、大陸のように近代化にもなうナショナリズムの形成は遅かったわけです。たとえば、みなさんご存じの通り、スコットランド人の多くはイギリス（そしてイングランド）が嫌いなわけです。また興味深いことに、現在のイギリス女王は、もともとイングランド系ではなくドイツ系です。

そうしたイギリスでは、「市民」は、フランスのような「国家の市民」ではなく「コミュニティに貢献する地元民」といった意味合いがあります。つまり、イギリス文化への統合ではなく、自身が暮らす（エスニック・）コミュニティ内でトラブルなく平和裏に過ごす、それが「良い市民」なわけです。そういうローカリズムの背景にはいろいろ考えられます。たとえば、政治的近代化に関し、民衆による王権の打倒をおこなったフランスに対して、イギリスの名誉革命はあくまでもローカルな貴族による自治拡大要求と限定的な王権の承認であったという点も関係しているかもしれません。こうした、イギリスのローカリズムの伝統については、前著で議論しています。関心ある方は手にとってください。

後藤：ありがとうございます。お次の方、お願いします。

質問者4：アメリカやイギリスでイスラモフォビアがまずは大きなことですが、それに対して、自分は完全にイギリスのリベラルの価値を内在化していてそれとイスラームは矛盾しないという現実というはおそらくアメリカでも一般的だと思いますが、ただ一方でそういう言説自身がむしろイスラモフォビアを下支えしているという批判は常にありますよね。つまり、アメリカとおそらくイギリスにもある良いムスリムと悪いムスリムという形で、つまりリベラルな価値に適合するようなムスリムは認めるけども、それに反するのは駄目という。それがリベラルなムスリムに対して、他のムスリムから自制的に投げかけられて常にそれが問題視されている構図がありますが、そういう構図—イギリスとイスラームは矛盾しないんだから十分優良市民だ—というだけでは終わらない問題があると思いますが、そこら辺についてその語り手の方達ってというのはどの程度自覚的で、あるいは中にはそういうものをすごく批判して、何か別の視点を出してくるような人は、インタビューされた中ではありましたか。

安達：この点もかなり重要だと思っています。結局、＜良き／悪き＞ムスリム論の中に、私の議論も回収されてしまう可能性が確かにあるのです。

ただ、イギリス政府やアメリカ政府に対する憎悪みたいなものを持っている人はいましたが、イギリス人やアメリカ人を非難したりすることはありませんでした。また、一時期イギリスのメディアを賑わしていたような、隔離化されたムスリム・コミュニティやイスラーム国家を作らしようといった意見はほとんど聞かれなかったです。そういう思いを持つ人は、広いムスリム・コミュニティのなかには存在するとは思いますが、それをあからさまに表明する人は少ないです。

確かに＜良き／悪き＞ムスリム論は注意すべき点があると思います。ただ、イギリスの移民第二世代ムスリムが置かれたコンテクストを考えることもまた重要です。彼女／彼らは、西洋社会で生まれ育ち、その社会へのムスリムとしての参加を望んでいます。加えて、すでに論じていますように、9・11後のイスラモフォビックな環境のなかで、それへの応答を通じてイスラームを構築しているわけです。それは確かに「強いられた」応答なわけです。しかし、そもそも「環境」は、人々にとって常にすでに一種の所与なのであり、その意味で否応なく課されるものです。その意味で、環境を欠いた純粋なイスラーム、あるいはイスラームそれ自身といったものは存在せず、絶えず時代のコンテクスのなかで人々によって解釈・実践され、再生産されていくわけです。したがって、本書でみられる、移民第二世代ムスリムのアイデンティティ呈示戦略もまた、そうした固有の文脈のなかでおこなわれている実践であり、その意味では強いられたものなのです。しかし、繰り返しになりますが、そうした文脈なしに、宗教といったものは考

えられないではないかとも思っています。つまり、現代西洋社会における＜善／悪＞という認識枠組みにそって発展させられるイスラームもまた、長い歴史のなかに現れる一つのあり方なのだといえるかもしれない、というわけです（この点についてはなお批判はあるでしょうが…）。

後藤：ありがとうございました。それでは次の質問者の方、お願いします。

質問者5：今日の鳥山さんと安達さんの議論のところで私はすごく安達さん寄りというか、私がそもそも社会言語学に関心があって、私は別にイスラームをネタにしていたわけではありませんが、社会学の理論とか多言語使用の理論もかなりヨーロッパ発というか、ヨーロッパにすでにこういう理論があってそれに対して何か貢献しなきゃいけない、どうしてもその枠組みで何か語らなきゃいけないので、本とかまとまった何かを見る時はイスラームの知識は持っていて当然だよねとか言われていますが、イスラームの知識を彼らなりに捉えるとか、社会学の理論から捉えることを一生懸命やって、そういった理論の話をしているのになかなか細かくて、その辺りを色々書いてらっしゃるところで、80人にもインタビューしていらして。人類学でも色々事例があると思いますが、80人に対して同じような質問をしてこんなにまとまった結果が出て、しかもエスニシティバラバラでこれが出たのは私としては結構すごい価値あることだなと思いました。

後藤：ありがとうございました。思わず安達派がここに出てきて楽しくなってきて、いい感じにまとまったところでお開きにしたいと思います。安達さん本当にありがとうございました。皆さんもご参加本当にありがとうございました。
